

研究報告

日本の看護系大学の臨地実習における
ヒヤリ・ハットに関する文献検討

The literature review on incidents during the clinical training of nursing university

藤井美穂子 下里裕美 入里梓 島田祥子 米山万里枝

Mihoko FUJII, Hiromi SHIMOSATO, Azusa IRISATO, Shoko SHIMADA, Marie YONEYAMA



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

〈研究報告〉

日本の看護系大学の臨地実習におけるヒヤリ・ハットに関する文献検討

The literature review on incidents during the clinical training of nursing university

藤井美穂子 下里裕美 入里梓 島田祥子 米山万里枝

東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科・助産学専攻科

Mihoko FUJII, Hiromi SHIMOSATO, Azusa IRISATO, Shoko SHIMADA, Marie YONEYAMA

Division of Nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University. Graduate Course of Midwifery

要 旨：本研究の目的は、国内の看護系大学の臨地実習におけるヒヤリ・ハットに関する文献を検討し、助産学実習中のヒヤリ・ハットを防止するための研究課題を明確にすることである。2015年1月に医学中央雑誌WEB版により「ヒヤリ・ハット」「インシデント」「学生」「看護大学」「助産」に関連するキーワードを用いて過去10年間における原著論文の検索を行った。助産師学生と看護学生の実習中のヒヤリ・ハットに関連する内容が記述されている論文の計24件を対象として文献の類似性に着目して分類した。その結果、＜ヒヤリ・ハット発生の背景＞＜医療安全教育の効果＞の2点に大別でき、指導効果の妥当な評価に関する研究は行われていないことが明らかとなった。また助産師学生を対象とした先行研究はほとんどなく、実習中に学生がヒヤリ・ハットをどのように体験したのか、その後の振り返りを含めた現象を明らかにし、今後の教育・指導効果に繋がるような研究を行うことが課題である。

キーワード：ヒヤリ・ハット、臨地実習、文献検討

Keywords：Incidents, clinical training, literature review

I. 序論

医療事故が社会問題となり、2001年には厚生労働省に医療安全推進室が設置され、2002年に「医療安全推進総合対策」報告書¹⁾がまとめられた。その中では、医療者個人や医療機関のみならず、行政や教育機関、企業も含め医療に関わるすべての者が医療安全に積極的に取り組むべきであるとの方針が示された。医療安全のためには、他の医療従事者との十分な意思疎通と良好でオープンな関係を築くことが求められているが、近年の学生はこれらの能力が不足している傾向にある²⁾。そのため、療養上の世話を行う看護師や分娩介助等を行う助産師の養成機関において、患者の安全を第一優先に考えられる質の高い専門職者を育成することが急務である。

2008年の保健師助産師看護師学校養成所指定規則（以下指定規則）の第4次改正では、新たに「看護の統合と実践」が設けられ、「医療安全の基本的知識の習得」が明文化された³⁾。助産師教育においても、2011

年の指定規則の改正で、助産管理学の単位数が2単位へと増えて卒業前教育として医療安全に関する教育が強化されている。

本学の助産学専攻科においても医療安全管理学の講義の中で、学生のヒヤリ・ハットの認識を高めることを目的に、学生各自の臨地実習での体験をレポートに記し振り返りを行っている。私達は、学生のレポートを読み学生全員が助産学実習中に何らかのヒヤリ・ハットを体験している現状を知り、医療安全教育充実の必要性を感じた。そこで、過去10年間に報告された研究成果を把握し、助産学教育における効果的な医療安全教育方法を検討するため、臨地実習におけるヒヤリ・ハットに関する文献検討を行った。尚、本研究では、助産学教育に限定して文献検討を行った場合に該当文献数が限られたことから、看護大学の臨地実習におけるヒヤリ・ハットの文献を検討した。

Ⅱ. 目的

助産学教育における実習中のヒヤリ・ハットを防止するための研究課題を明確にする。

Ⅲ. 方法

2015年1月に医学中央雑誌Web版Ver.5、J-dreamⅢ、CINII、最新看護索引web、ハンドサーチによりヒヤリ・ハットに関する文献により、2005年から2014年の過去10年間において、「ヒヤリ・ハット」「インシデント」「学生」「看護大学」「助産学」をキーワードとし、「原著」に限定して文献検討を行った。

そこで得られた文献から、看護系大学のインシデント及びヒヤリ・ハットに関連した内容に触れられている文献を抽出した結果、19件を得た。その中で、臨地実習に関しての記述がある論文、かつ研究目的や研究成果を明確に記載している論文11件を抽出した。次に「ヒヤリ・ハット」「インシデント」「学生」で検索してヒットした118件の看護学分野における論文のうち、前述の論文と重複したものを除き、看護大学生を対象とした論文を抽出した。その中から、内容が看護学実習時に発生したヒヤリ・ハットの実態やその教育効果に関連した文献13件を抽出した。本文献検討では、看護系大学においてどのような研究が行われているのかに着目して、ヒヤリ・ハットを防止するための研究課題を明確にすることを目指している。そのため、大学教育に関する記述のあった24文献を分析の対象とした。24件の対象文献を発表年度、研究対象者、研究デザイン、内容別に整理し分類した。さらに、論文の主旨を概観して、結果・考察から得られた知見から類似している箇所にテーマをつけて帰納的に分類した。全過程において共同研究者と共に検討し分析の妥当性を高めた。

表1

発行年	件数
2005～2006	6
2007～2008	7
2009～2010	4
2011～2012	4
2013～2014	3
計	24

表2

分類	件数
文献検討	2
量的研究	10
質的研究	10
量的・質的研究混合	2
計	24

Ⅳ. 結果

1. 文献の発行年（表1）

検索した2005年から2014年の10年間で2年ごとに区切り文献件数を示した。発行年別の推移としては、顕著な文献数の増減はみられなかった。

2. 研究デザインによる分類（表2）

対象となった文献24件を研究デザイン別に分類すると、文献検討2件（8.3%）、量的分析10件（41.7%）、質的分析10件（41.7%）、量的分析と質的分析の混合2件（8.3%）であった。

量的研究の多くは、学生が体験したヒヤリ・ハットの実態調査であり、自由記載を設けた質問紙を用いたものや、学生の記載したレポート及びカンファレンス内容を分析した調査であった。

質的研究では、半構成面接やグループインタビューによりデータ収集を行い、KJ法や内容分析を用いた帰

表3

研究対象者	件数
文献	2
看護系大学学生	11
(3年生)	3
(4年生)	7
(3,4年生)	1
看護系短期大学学生	5
(2年生)	1
(3年生)	3
(学年不明)	1
インシデント、ヒヤリ・ハットレポート	4
大学	2
短期大学	2
実習記録、カンファレンス記録	2
短期大学	2

納的な分析方法により、学生のヒヤリ・ハット発生時の感情、発生の要因、振り返りの方法やその効用、教員や指導者との関係などを明らかにしていた。

3. 研究対象による分類 (表3)

研究対象として、「文献検討」「看護系大学学生」の3,4年生、「看護系短期大学学生」の2,3年生、「インシデント、ヒヤリ・ハットレポート (以下レポート)」「実習記録、カンファレンス記録」に分類された。文献検討を除く全ての文献で、在籍学生もしくは在籍学生の記載したレポートを対象としていた。

学生を対象として調査した文献は大学・短期大学合わせて16件あった。量的に分析されたものの10件を概観すると、インシデントやヒヤリ・ハットの対象、内容、発生場所 (場面)、発生時期や時間帯、現場に居合わせた人物、発生時の報告の有無や報告相手、ヒヤリ・ハット体験時の指導内容、学生が考える原因について明らかになっていた。質的分析、量的・質的分析混合の12件からは、インシデントやヒヤリ・ハットの実態を調査した量的分析と類似した結果を述べていたほか、伊豆ら⁴⁾や永松ら^{5,6)}、畠山⁷⁾は、ヒヤリ・ハットを体験した学生の振り返りを含めた学習の実態について記述していた。

学生の筆録 (レポートや実習記録、カンファレンス記録) を対象とした文献は6件あり、そのうちの5件が帰納的に分析され、ヒヤリ・ハットの種類、原因、発生場面、対策などの実態が明らかになっていた。さらに、3年間の学年別推移を追った岡本⁸⁾の研究においては、学年が進むにつれ学生の成長とともに事故発生報告件数が減少していることの報告があった。

4. 研究内容別の分類 (表4)

1) 助産師学生を対象とした論文 (1件)

助産師学生に関する記述は、統合カリキュラムで助産教育を行っている大学での報告であり、学生が記述したインシデントレポートの内容を分析し、助産学実習におけるインシデントの種類や原因などの実態調査であった⁹⁾。その中でインシデント発生原因の一つとして、緊急時は特に緊張・焦り・頭の中が真っ白になるという学生の感情を明らかにしていた。

2) 看護学生を対象とした論文 (23件)

結果・考察から得られた知見から類似している箇所にテーマをつけて帰納的に分類すると (1) 文献検討2件、(2) ヒヤリ・ハット発生背景20件 (3) 医療安全教育の効果10件に大きく3項目に分類することができた。

(1) 文献検討

吉田ら¹⁰⁾は小児臨地実習に焦点を当て、カンファレンスの有効活用や、小児看護の現場で起こる学生・子ども・家族の三者関係における困難さに対応する関わり、効果的な実習運営、事故防止教育、小児看護の技術や倫理教育など教員の役割について明らかにしていた。また、深川¹¹⁾は4年制看護系大学新卒の看護師のインシデント報告が最も多いこと及び、インシデントが離職につながる原因であることから、教育内容のコアの設定や看護実践能力の到達度の公表等を指摘していた。

(2) ヒヤリ・ハット発生の背景

ヒヤリ・ハットの発生の背景の記述は、『学生の思考や行動の特徴』『学生の関心やきっかけ』『体験時に生じた感情』『発生しやすい時期や状況』に分類することができ、ヒヤリ・ハット発生の背景の多くは学生の未熟性が影響していることが概観された。

『学生の思考や行動の特徴』について記載された文献は、6件であった。堀ら¹²⁾は、学生の「報告」とインシデントの関係に焦点を当てた調査により、「報告忘れや遅れ」の発生時に、看護師が「忙しそう」「機嫌が悪そう」等の看護師の行動を気づかって報告が遅れたり、学生が緊張したりする場面で報告に関連するインシデントが起こっていることを明らかにしていた。また中野ら¹³⁾は「転倒・転落」に関連するインシデントについての認識及び対処について臨地実習記録から分析した研究により、学生はインシデントに関連する病態や心理面の影響、内服薬や睡眠等を結び付けてアセスメントすることが苦手であり、目に見える物理的な環境から危険予知する傾向が強いという特徴があることを報告していた。

『学生の関心やきっかけ』を記載した報告は1件で、玉田ら¹⁴⁾は、臨地実習中の医療事故及びインシデントの実態調査により、医療事故に関心をもったきっかけは主にニュース等のマスメディアであり、講義・演習、実習中の体験は医療事故への関心につながっていないことを明らかにしていた。

『体験時に生じた感情』についての文献は4件であった。畠山⁷⁾や玉田ら¹⁴⁾は、学生の感情や振り返りに焦点を当てヒヤリ・ハットの実態調査を行い、学生はヒヤリ・ハット体験時には主に驚きや恐怖、戸惑い、自責といった感情を抱くことを明らかにしていた。また城戸口ら¹⁵⁾は、インシデントを体験した学生は傷ついたと感じたり、指導を

表4 (網掛けは助産師学生を対象とした文献)

内容	筆頭著者 (発表年)	掲載雑誌	研究対象者	検討内容等
(1) 文献検討	文献検討	深川ゆかり(2007)	聖マリア学院紀要	「看護事故」「インシデント」「看護＋インシデント」「看護＋ヒヤリ・ハット」「看護＋ニアミス」で検索された文献(2000-2006年)
		吉田玲子(2014)	日本小児看護学会誌	「臨地実習」「小児」「看護系大学」教員や臨床指導者に焦点を当てた論文 25 件(2007-2013 年)
(2) ヒヤリ・ハット発生の背景	学生の思考や行動の特徴	安藤悦子(2007)	保健学研究	看護系大学 3 年生
		岡本寿子(2007)	京都市立看護短期大学紀要	看護系短期大学 1 年生によるヒヤリ・ハットレポート
		中野雅子(2007)	京都市立看護短期大学紀要	看護系短期大学 3 年生
		大久保友香子(2010)	京都府立医科大学看護学科紀要	助産学実習を履修した大学生によるインシデント・アクシデントレポート
		堀律子(2011)	日本看護学会論文集	看護系大学 4 年生
		半崎めぐみ(2012)	日本看護学会論文集	看護系大学 4 年生
	学生の関心やきっかけ	玉田圭子(2004)	日本看護学会論文集	看護系大学 4 年生
		(再掲)玉田圭子(2004)	日本看護学会論文集	看護系大学 4 年生
	体験時に生じた感情	城戸口親史(2006)	山梨県立看護大学短期大学部紀要	看護系短期大学 3 年生
		(再掲)堀律子(2011)	日本看護学会論文集	看護系大学 4 年生
		畠山加奈子(2012)	北海道医療大学看護福祉学部学会誌	看護系大学 4 年生
		布施淳子(2005)(再掲)	日本看護学会論文集	看護系大学 4 年生
	発生しやすい時期や状況	松本明美(2006)	川崎医療短期大学紀要	看護系短期大学 3 学年
		(再掲)安藤悦子(2007)	保健学研究	看護系大学 3 年生
		日下知子(2007)	川崎医療短期大学紀要	看護系短期大学 2 年生
		岡本寿子(2008)	京都市立看護短期大学紀要	看護系短期大学 1-3 年生による「ヒヤリ・ハット」レポート
		伊豆麻子(2009)	新潟青陵学会誌	看護系大学 3 年生
		風岡たま代(2011)	横浜創英短期大学紀要	看護系短期大学 3 年生
		畠山加奈子(2012)	北海道医療大学看護福祉学部学会誌	看護系大学 4 年生
		(再掲)半崎めぐみ(2012)	日本看護学会論文集	看護系大学 4 年生
	振り返りの効果	加藤愛子(2006)	足利短期大学研究紀要	看護系短期大学 2 年生のカンファレンス記録
		村上静子(2009)	日本看護学会論文集	看護系大学で実施されたインシデントレポート
		永松いずみ(2013)	日本看護学会論文集	看護系大学 4 年生
		永松いずみ(2014)	大分大学高等教育開発センター紀要	看護系大学 4 年生
	他者体験の共有	(再掲)城戸口親史(2006)	山梨県立看護大学短期大学部紀要	看護系短期大学 3 年生
		矢吹明子(2007)	京都市立看護短期大学紀要	看護系短期大学学生 (学年不明)
		(再掲)永松いずみ(2013)	日本看護学会論文集	看護系大学 4 年生
	実習前の周知	内田陽子(2005)	群馬保健学紀要	看護系大学 3,4 年生
		(再掲)大久保友香子(2010)	京都府立医科大学看護学科紀要	助産学実習を履修した学生によるインシデント・アクシデントレポート
		恩幣宏美(2010)	群馬保健学紀要	看護系大学 3 年生

受けた内容に対して納得できないと否定的な感情を示したりする学生が一部存在することを示し、ヒヤリ・ハットを未然に防ぐための内省に感情が向いていない未熟な表現があったことを明らかに

していた。

『発生しやすい時期や状況』についての記述は9件であった。伊豆ら⁴⁾や日下ら¹⁶⁾はヒヤリ・ハット発生の実態を報告していた。ヒヤリ・ハット

の発生が多い時期は、実習開始直後を除く実習前半及び長期休暇明けであり、学生がバイタルサイン測定等の直接的ケアを実施する際に多発していたことを明らかにしていた。また風岡ら¹⁷⁾は「急性期」と「慢性期」のヒヤリ・ハット発生状況を比較し、より直接的ケアを実施する機会の多い慢性期での直接的ヒヤリ・ハット体験が多いことを報告していた。母性看護学実習においても、看護学生は新生児に対する場面でヒヤリ・ハットが多く、学生が直接的にケアを提供する場面においてヒヤリ・ハットが発生していること¹⁸⁾から、学生のケア技術の未熟性が要因であることが指摘されていた。

また事故発生時の状況として、側にいた人の有無を明らかにした文献は2件あり、ヒヤリ・ハット現場にいたのが学生のみであった場面が最も多かった。さらに学生の手技や行動の未熟さを熟知出来ていなかったため、病棟看護師や担当教員が付き添っていた際にもヒヤリ・ハットを予防できなかったことの報告があった^{19,4)}。

さらに松本ら¹⁸⁾や安藤ら²⁰⁾は、インシデントやアクシデント発生の原因を調査し、記憶・判断・確認が大部分を占めていることを明らかにした。これらは、注意不足、知識不足、記憶不足、報告不足、思い込みなどが原因であり、ヒヤリ・ハット発生の背景には学生の手技のみならず思考過程の未熟性も関連していることを明らかにしていた。

(3) 医療安全教育の効果

医療安全教育の効果は、『振り返りの効果』『他者体験の共有』『実習前の周知』に分類された。『振り返りの効果』『他者体験の共有』についての記述は6件あり、永松ら^{5,6)}や村上ら²¹⁾、加藤ら²²⁾は、ヒヤリ・ハットを体験した学生が、他者の体験をカンファレンス等で振り返ることで自己の学習に効果に役立てていることを記述していた。

『実習前の周知』については次の3件の記述があった。大久保ら⁹⁾は看護学士課程の助産師学生によるインシデントレポートを対象として助産学実習におけるインシデントの実態調査を行っており、実習前に学生の思考や行動の特徴と起こりやすいインシデントを周知したことでその事象に対する注意喚起が促された効果を記述していた。また内田ら²³⁾や恩帋ら²⁴⁾は、看護大学生を対象とした調査により、学生に臨地実習前にヒヤリ・ハットの具体的な事例等に関するデータを示すことにより、学生のヒヤリ・ハットの認識へとつなが

りリスク回避できることを明らかにしていた。

V. 考察

今回、助産学実習における医療安全教育のための基礎的研究として文献検討を行った。ここではその結果を踏まえ、学生のヒヤリ・ハットを未然に防止する指導、助産学実習における医療安全教育の2点について考察を述べる。

1. 学生のヒヤリ・ハットを未然に防止する指導

学生はヒヤリ・ハットに対する経験知が低く危険を予知することが未熟でヒヤリ・ハットを回避することが困難であることが推察できる。学生のヒヤリ・ハットを未然に防止するためには、医療事故の知識を高めることやヒヤリ・ハットを防ぐ環境が必要であることが先行研究で報告されていた。ヒヤリ・ハットを未然に防止するためには、実習開始前の学生に対して、過去のヒヤリ・ハット事例を基に学生の思考や行動の特徴、及びヒヤリ・ハットの起こりやすい事象を周知することの必要性^{9,23)}や、実習終了後に学生の体験したヒヤリ・ハットをカンファレンス等で振り返り、他の学生と体験を共有することが医療安全に対する意識を高めることに有効である^{5,6,21,22)}。つまり、教員は学生に対して実習前後を通して臨地実習で遭遇するリスクを予測し医療安全に関する知識を与え、学生の医療安全に対する感性が促進するように教育していく必要がある。さらに、学生は自己の体験したヒヤリ・ハットを報告する際に否定的な感情を抱くことや、自身の未熟さを感じるなど自尊感情が低下する傾向にあることが報告されており、振り返りを実施する際は、振り返ることができたことの有用性等を肯定的に捉えられるようにファシリテートする必要がある。

また、学生は、冷静な状態を保つことが難しい実習環境の中でヒヤリ・ハットを体験していたこと¹⁸⁾や、ヒヤリ・ハットに直結する報告の遅れ・忘れ等には実習環境や学生の看護師に対する気づかいが影響していたこと¹²⁾が明らかになっていた。このことより、教員は臨床指導者と協働して学生のヒヤリ・ハットを未然に防ぐために、学生が緊張したり慌てたりする状況を回避するよう実習環境を調整していく必要がある。

厚生労働省が報告した医療安全の確保に向けた保健師助産師看護師法等のあり方に関する検討会のまとめ²⁵⁾では、新卒看護職員の約58%がヒヤリ・ハット(インシデント)レポートを書いた経験があり、仕事を辞めたいという気持ちに影響していることが明らかになっている。つまり、ヒヤリ・ハット体験は、看護師の離職率にも繋がる重要な課題であり、学生の臨地実

習から医療事故に対する知識を高め感性を養っていくことが必要である。

ヒヤリ・ハットに関する研究のほとんどが、学生の体験を明らかにした研究であり、実際に臨地での指導がどのように行われているのかを明らかにした研究はほとんどなかった。半崎ら¹⁹⁾は、ヒヤリ・ハットが発生する原因として、学生だけで実施できる技術範囲の認識不足や患者の頼みを断れないなどの背景があることを指摘し、ヒヤリ・ハットが発生した際に看護師といることが少なくなかったことから、学生や臨地実習で学生に関わる看護師が学生の実施可能な看護技術内容を把握していない可能性を指摘している。学生が、ヒヤリ・ハットに対する知識や感性を高めて危険を回避するために、臨床現場と教育現場が協働して学生の実習環境を整えていく必要がある。

2. 助産学実習における医療安全教育

日本助産師会は助産師の声明の中で、助産管理における助産師の役割・責務として医療事故防止に努めることを提言している。また、助産業務ガイドライン2014では、医療安全上留意すべき事項が重要な事項として明記されている。教育の現場においても、助産師国家試験では、2014年より2年連続して産科保障制度に関する問題が出題されるなど、教育現場の中でも医療安全に関する教育が重視されてきていることが推察される。

しかし、過去10年の文献を鑑みると助産師学生が体験したヒヤリ・ハットに着目した論文は、学生が提出したヒヤリ・ハットレポートを分析した大久保ら⁹⁾の1論文であり、ヒヤリ・ハットが分娩場面や沐浴場面で起こりやすいことの報告があった。この結果は、母性看護学実習において看護学生が直接的ケアを実施する場面でヒヤリ・ハットが多いことを述べた松本ら¹⁸⁾の報告を示唆する結果であった。つまり、学生が臨地実習において直接的にケア介入する場面でヒヤリ・ハットが多く生じている。分娩介助等の直接的なケアを行う機会の多い助産師学生において、危険を回避する場面は数多くあることが推察される。さらに、堀ら¹²⁾や畠山⁷⁾が看護実習におけるヒヤリ・ハットの原因として心理面の影響を指摘しているが、助産学実習においても緊張や焦り等の学生の心理面の影響が多いことが明らかになっており⁹⁾、刻一刻と変化する分娩の状況に対応できるような演習の必要性や危険予知能力の向上を意識した教育の必要性が示唆されていた。しかし、助産師学生に対して予知能力の向上を図るためにどのような教育的な手立てがあるのか、実際の指導に示唆を得られるような報告はほとんどない。ハイリス

ク妊婦が増える昨今の社会背景の中で、医師と協働しながら助産師の業務拡大と質の保証が課題となっており、今後ますます助産師の医療安全に対する認識を高める必要がある。教育現場においては、実習中に学生がどのようなヒヤリ・ハットに遭遇しているのかその体験を明らかにしていく必要がある。

VI. 結論

助産学教育における実習中のヒヤリ・ハットを防止するための研究課題を明確にするために文献検討を行った結果、以下の結論が得られた。

1. 臨地実習においてヒヤリ・ハットを防止するためには、実習前にヒヤリ・ハットに関する注意喚起をすること及びヒヤリ・ハットの体験を学生同士で共有することが効果的であることが明らかとなっていた。
2. 実習開始前にヒヤリ・ハットに関する予知能力の向上が重要であることが示唆されているが、助産師学生を対象とした論文は少なく、教員や臨床指導者の関わりや教育方法に関する示唆を得られるような先行研究はほとんどない。実習中に学生がヒヤリ・ハットをどのように体験したのか、その後の振り返りを含めた現象を明らかにする必要がある。

文献

- 1) 厚生労働省. 医療安全総合推進対策～医療事故を未然に防止するために～ 2002.
- 2) 厚生労働省. 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 2007; 1-2.
- 3) 再掲2; 14-17.
- 4) 伊豆麻子, 久保田美雪, 内藤守, 他. 臨地実習と医療安全教育 学生が捉える臨地実習での事故およびヒヤリ・ハット. 新潟青陵学会誌 2009; 1 (1): 61-70.
- 5) 永松いずみ, 宮崎伊久子, 原田千鶴, 志賀たずよ, 加藤美由紀, 佐藤祐貴子. 医療安全教育プログラムを受講した看護学生の臨地実習中のヒヤリハット体験の実態. 日本看護学会論文集: 看護教育 2013; 54-57.
- 6) 永松いずみ, 宮崎伊久子, 原田千鶴, 志賀たずよ, 佐藤祐貴子, 吉良いずみ, 加藤美由紀. 段階的に医療安全教育プログラム受講した看護学生の实習中のヒヤリハット体験に対する振り返り学習の実態. 大分大学高等教育開発センター紀要 2014; 1-8.
- 7) 畠山加奈子. 臨地実習におけるヒヤリハット体験時の実態調査—学生の感情と振り返りに焦点を当てて—. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌 2012; 8 (1): 51-55.

- 8) 岡本寿子. 臨地実習における安全意識教育「ヒヤリ・ハット」レポート3年間を通しての効果と課題. 京都市立看護短期大学紀要 2008; 33: 13-20.
- 9) 大久保友香子, 和泉美枝, 松田かおり, 松岡知子, 眞鍋えみ子. 看護士課程の助産学実習におけるインシデント・アクシデントの実態 レポート導入後2年間の分析. 京都府立医科大学看護学科紀要 2010; 19: 1-6.
- 10) 吉田玲子, 川名るり, 江本リナ, 太田智子, 山内朋子, 筒井真優美. 日本の看護系大学の小児看護学実習における教員および臨地実習指導者の指導内容. 日本小児看護学会誌 2014; 23 (3): 92-99.
- 11) 深川ゆかり, 大橋 知子. 4年制看護大学における「安全」教育の必要性 インシデント文献検討より. 聖マリア学院紀要 2007; 21: 43-47.
- 12) 堀律子, 橋本宜子. 看護学生の「報告」に関するリスクマネージメント グループディスカッションによるインシデントの要因および対策の検討. 日本看護学会論文集: 看護管理 2011; 41: 110-113
- 13) 中野雅子, 矢吹明子, 鯉坂由紀, 吉田広美. 看護学生が老年看護実習で体験した「転倒・転落」に関連するクリティカルインシデントの分析. 京都市立看護短期大学紀要 2007; 32: 81-91.
- 14) 玉田圭子, 高橋方子. 看護学生のインシデント・医療事故に対する認識とサポート. 日本看護学会論文集: 看護教育 2004; 35: 280-282.
- 15) 城戸口親史, 巴山玉蓮, 古屋洋子. 看護学生の臨地実習におけるインシデント、アクシデント体験の現状. 山梨県立看護大学短期大学部紀要 2006; 12 (1): 43-49.
- 16) 日下知子, 松本明美, 沖田聖枝. 看護学臨地実習におけるインシデント・アクシデント調査報告—事故防止に対する教育方法の検討—. 川崎医療短期大学紀要 2007; 27: 7-12.
- 17) 風岡たま代, 伊藤ふみ子, 有田清子. 成人看護学実習での看護学生のヒヤリハット 急性期実習と慢性期実習での比較. 横浜創英短期大学紀要 2011; 7: 57-66.
- 18) 松本明美, 登喜玲子, 日下知子, 山口玲子. 母性看護学臨地実習におけるインシデント・アクシデントの実態と教育上の課題. 川崎医療短期大学紀要 2006; 26: 37-44.
- 19) 半崎めぐみ, 尾崎道江. 病院実習における看護学生のヒヤリハットの実態とその要因. 日本看護学会論文集: 看護総合 2012; 42: 346-349.
- 20) 安藤悦子, 郡司理恵子, 岡田純也, 川波公香, 浦田秀子, 寺崎明美. 成人看護学実習におけるヒヤリ・ハット体験に関する実態調査. 保健学研究 2007; 19 (2): 65-74.
- 21) 村上静子, 野澤明子, 杉山琴美. 成人看護学実習における学生のインシデント経験の探究 療養上の世話に関する分析: 日本看護学会論文集: 看護教育 2009; 39: 352-354.
- 22) 加藤愛子, 富沢美幸. 基礎看護学実習における安全意識. 足利短期大学研究紀要 2006; 26: 55-60.
- 23) 内田陽子, 新井明子, 小泉美佐子. 老年看護学実習における学生のヒヤリハットの内容と教育方法. 群馬保健学紀要 2005; 26: 81-87.
- 24) 恩幣宏美, 武居明美, 堀越政孝, 他. 成人看護学実習を履修した看護学生のヒヤリハットに対する知識と認識について. 群馬保健学紀要 2010; 30: 9-18.
- 25) 厚生労働省. 医療安全の確保に向けた保健師助産師看護師法等のあり方に関する検討会 まとめ 2005. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2005/11/s1124-5.html> (2015.4.23参照)

